

クロスケの家周辺における アカネズミ捕獲調査

関 遼太郎

(早稲田大学人間科学学術院)

要旨

アカネズミ(*Apodemus speciosus*)は、日本の森林地帯に広く分布する日本固有種である。アカネズミは環境の変化に対して敏感な反応を示すこと、フクロウ(*Strix uralensis*)など捕食者の重要な資源となることなどから、周囲の環境状態、生物多様性を知る上での指標の一つとなる。そこで、アカネズミの生息の有無を確認することを目的とし、シャーマントラップによる捕獲調査を行った。その結果、アカネズミや他の小型哺乳類の捕獲は確認されなかったが、アカネズミの生息状況は狭山丘陵周囲の環境について知る上で重要なデータであるため、継続した調査とデータの蓄積を今後も続けていくことが望ましい。

キーワード：シャーマントラップ

はじめに

アカネズミ(*Apodemus speciosus*)は、北海道から九州までの森林地帯に広く分布する日本固有種である(阿部 1994)。一般的にアカネズミは低地から低山帯に生息し、下層植生の発達した場所を選好性を持つと言われている(関島 1999)一方、代償植生や河川敷など幅広い環境に柔軟に適応することが知られている。また、エサ資源の増減や植生の変化によって個体数が大きく変動するなど環境の変化に対して迅速な反応を示す種であることが指摘されている(箕口 1988; 関島ほか 2001)。加えて、アカネズミはフクロウ(*Strix uralensis*)など捕食者の重要な資源となっている(今泉 1968)。このような点から、アカネズミの個体数を知ることは、周囲の環境状態、生物多様性を知る上での指標の一つとなる。そこで、今回はクロスケの家の周辺におけるアカネズミの生息の有無を確認することを目的とし、シャーマントラップによる捕獲調査を行った。

方法

アカネズミの捕獲調査は、2013年7月20日に行った。捕獲に際しては、シャーマン式トラップと、H.B.Sherman Traps社製のシャーマントラップを使用した。餌には、生のピーナッツを用いた。

調査区は、クロスケの家の周辺の傾斜のある竹林、家屋の壁面、広葉樹林に近いクマザサ群落、広葉樹林とした。トラップの設置は、クロスケの家に来ていた中学生8人をお願いした。アカネズミの生態などについて簡単な講義をした後、1人2つずつトラップを渡し調査区内に任意に設置した。設置トラップ数は、中学生が設置したトラップを含めて計20個である。設置したトラップは、設置後約2時間ごとに数回見回りをし、翌朝回収した。

結果

アカネズミは捕獲されなかった。また、その他小型哺乳類の捕獲も確認されなかった。

考察

考えられる原因として以下の3つが挙げられる。1つは、アカネズミの生息数がもともと少ない可能性である。アカネズミは、前述のように森林を主な生息地としている。調査地周辺は、住宅や畑地が多く、アカネズミの好適な森林があまり見られなかった。このことから、調査地周辺はアカネズミにとっては好適な生息場所ではなく、生息する個体数が少ない可能性がある。

2つめは、捕獲努力量の少なさである。ネズミ類の調査においては、通常50から200個のトラップを使用し、調査期間も3晩から5晩連続で調査を行う。しかし、本調査においては、使用したトラップは20個であり、調査期間も1晩だけであったことから、十分な捕獲努力量であったとは言い難い。

最後に、調査当日には同時に昆虫の採集が行われており、ライトトラップが調査地周辺に2地点設置されていた。また、調査当日は、ライトトラップの見回りなどにより、調査地内への人の出入りが多かった。このようなことが、少なからず調査に影響した恐れがある。

一方、本調査においてはアカネズミが環境教育で重要な教材になる可能性が示唆された。本調査に参加した中学生に話を聞くと、「アカネズミを捕獲したかった」、「家の周りも注意深く見てみようと思った」などの声が聞かれた。環境教育において、野生哺乳類は参加者の興味をひきつける格好の素材である(林ほか 2011)。しかし、野生哺乳類の多くは、夜行性であり、また個体数が少ないために環境教育の現場で扱う事は難しく、実際に教材として扱う例は少ない(小林 1999)。アカネズミは小型齧歯類であり、シャーマントラップなどで簡単に捕獲できること、多様な環境に柔軟に対応するなど身近に生息する哺乳類の一種である。アカネズミを実際に捕獲する経験は、野生の哺乳類を間近で観察する貴重な機会であり、周囲の環境に目を向ける大きなきっかけとなる可能性がある。

おわりに

隣接する狭山丘陵においては、アカネズミの生息が確認されている。調査地周辺は、住宅地が多いものの、畑地や小規模ながら雑木林が残っている場所も見られる。アカネズミは、周囲の環境状態、生物多様性の指標の一つとなることから、今後も狭山丘陵周囲の環境について知る上で重要なデータであり、継続した調査を行い、データの蓄積をすることが望ましい。

引用文献

阿部永 (1994) 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 神奈川. 206pp.

林典子・井上真理子・大石康彦 (2011) アカネズミの食性調査手法の簡易化と環境教育における利用の試み. 森林総合研究所研究報告. 10(3). 229-237.

今泉吉晴 (1968) フクロウのペリットの分析. 動物学雑誌 77 : 402-404.

小林毅 (1999) 哺乳類を素材とした環境教育 - アニマルウォッチングのガイドラインづくり - .

哺乳類科学 39 : 88.

箕口秀夫 (1988) ブナ種子豊作後 2 年間の野ネズミ群集の動態. 日本林學會誌 70(11): 472-480.

関島恒夫 (1999) ヒメネズミ *Apodemus argenteus* とアカネズミ *A. speciosus* の微生息環境利用の季節的变化. 哺乳類科学 39 : 229-237.

関島恒夫・山岸学・石田健・大村和也・澤田晴雄 (2001) 森林伐採後の植生回復初期過程におけるヒメネズミ *Apodemus argenteus* とアカネズミ *A. speciosus* の個体群特性. 哺乳類科学 41 : 1-11.